
アフリカスミレも泣く場合

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフリカスミレも泣く場合

【Nコード】

N58930

【作者名】

大森ろら

【あらすじ】

短期の仕事についた「わたし」。そこでする仕事は本を読む仕事だった……。

変化のない仕事を続けることからくる苛立ちと幻想的な世界をまぜあわせた物語。

【注意】この作品は私の個人サイトでも公開しています。

<http://rorra.ikidane.com/>

それはたかだか一ヶ月の仕事。

五人ともそのときが初対面だったけれどおなじ派遣会社から派遣されてきたということだけでけっこう早く打ちとけられた。みんな二十代で、そのなかでも年長が市川さん、イチチーさん。眼鏡の似合う知的な女性で、なんでも転職の間のつなぎだとか。年齢順にいうと次はわたし。保川だからやっちゃんと呼ばれる。あまりうれしくはないけれどまあしかたない。アロマセラピーの勉強中。次は榊太郎君。前の会社が潰れてやはり転職先を探し中。小倉都、みやちゃん。彼女が一番派遣暦が長い。正社員の仕事につく気はいまのところない模様。一番年下が大学を出たばかりの牧田君。お金をためて留学を予定。留学先はいくつかの候補地のなかでまだ思案中だとか。

わたしたちは事前に連絡されていたとおり、会社の三階の一番奥の狭い部屋に集められてそこで直属の上司となる女性と対面した。そのひとのことをわたしたちはスミレさんと呼ぶことにする。なぜなら彼女の机にピンク色の花の鉢植えがおいてあって、彼女がその花の名前をアフリカスミレだとわたしたちに教えてくれたからだ。彼女はイチチーさんと同じ年で、チャコールグレーのスーツをスタイルのいい体で着こなすなかなかの美人だった。彼女が耳と首筋につけている偽物っぽい銀色の華奢なアクセサリーがなぜか女性らしくみえて特に牧田君なんかは興味津々といったふうに「この花、すきなんですか」とかにこにこしてたずねていた。「うちにむかし温室があつて、そこでこの花を育ててたの」と彼女はこたえた。「なかなかかわいい花でしょ」

「温室がご自宅にあつたんですか」とイチチーさんが鉢植えをじつとみつめながら言った。

「温室つていつてもちいさいやつよ。父親がそういうのにこつてたから」

仕事の内容はそっちのけでまず彼女の温室の話で我々は盛り上がったわけだ。初日というのはやはりみんなどこか緊張しているものだから、彼女はわざと話を脱線させたままみんなに喋らせていたのかもしれない。

それからしばらくしてようやく仕事の説明が簡単にあつて「まあそんなに難しくはないんで」とスミレさんは笑い、わたしたちも笑い、「じゃあとりあえず皆さん自分の名前がはつてある本棚のところにいって、一番左上端の本をとってみしうか」というふうに仕事ははじまつた。

わたしたちを取り囲むようにして置かれていた本棚には天井あたりまでぎっしり本が詰まつていた。本はすべてひとりの人間によつて書かれたものようだったけれど、だれもその作者の名前に覚えがなかつた。どの本も一度も開かれたことがないようで、頁を開くと紙のにおいがふわつとした。それは小説ではなく、回想録のようなものだった。表紙には著者の名前と番号しか記されていない。

はじめわたしはみんなそれぞれ別のものを読んでいるのだとおもつた。書いている人間はおなじでも、書かれている内容はちがうものだとおもつていた。まさか五人それぞれの本棚にまつたくおなじ本が並べられているとは想像もしなかつた。わたしたちがおなじ本を読む意味がどこにあるのかとおもつた。

わたしたちは一章ごとにその要約を原稿用紙二枚にまとめてスミレさんに提出し、彼女はそれを薄いノート型パソコンに打ち込んで保存した。それがいつたいなにに使用されるのかわたしたちにはまつたくわからなかつた。そのことをたずねると、スミレさんは「うちの会社は依頼があればなんでも請け合うから」とこたえた。「やばい仕事以外はね」

どこかのお金持ちがひとを雇つてまで自分の回想録を他人に読ませようとしているのだらうか。だとしたらご苦労なことだとわたしたちはおもつた。

五人みんながまじめに本を読んでいたのは初日ぐらいで、二日目

からはすでにみんなやる気を失っていた。みやちゃんは隣の牧田君と小声でおしゃべりをはじめ、タロウ君はざっと目をとおしただけで原稿用紙を埋めはじめ、イッチーさんは考え込んでいるふうを装いながら頼杖について窓の外を眺めはじめた。

スミレさんはそんなわたしたちになにかいうでもなく、ずっとぱたぱたと指先を動かし続けていた。それはまるでピアノを弾いているかのような音だった。しかもちょうどわたしは回想録のなかの（わたし）がピアノを習う部分を読んでいた。

自分が音楽にはむいていない人間であることはすぐにわかった。先生がひとさし指でどこかの鍵盤を鳴らし、「この音は？」とたずねる。

わたしはすこし考える。そこからしてまちがっている。考えるようなことではないのだ。

勇気をもって、わかりません、というべきだった。

先生もわたしがわからないことはわかっていた。

でもわたしがなにかこたえるのを待っていた。

「ファ」

とわたしはいつてみる。

「ラ」

と先生がいう。

ラ、ラ、ラ、と先生がつよく鍵盤を叩く。

「適当に休憩とってくださいね」とスミレさんが声をかける。

はあい、とわたしたち。

イッチーさんが部屋を出ていく。みやちゃんもあとを追っていく。牧田君があーと声をあげながら伸びをして窓際に歩いていく。タロウ君がどんなふうに書いてる、とわたしの原稿用紙をのぞきこむ。わたしたちはお互いの原稿用紙を交換して、それから彼がわたしのよく書けているとほめる。わたしもそうおもう。このなかではた

ぶん一番わたしがちゃんとこの本を読んでいるのだろうから。

スミレさんが部屋を出ていくと、タロウ君が自分の椅子をわたしのほうへ寄せてきて小声でいう。

「でもそんなにちゃんと書かなくってもさ」

「これでもけっこう適当だよ」

「これで？」

「うん」

「へえ」

ときどき、皆川さんというひとがやってきて、スミレさんとはばらく話をしていく。

すらつとして、よくスーツが似合っている。声が静かで、ときどきおもいだしたように笑みを浮かべる。

スミレさんはほかにも仕事をうけてもっているらしく、ときどき彼といっしょに部屋から出ていつて何時間も留守にする。「なにか用があつたら内線の三番にかけてくださいね」とわたしたちに一声かけて。

皆川さんが来るようになってから牧田君はあまりスミレさんに話しかけなくなつた。イチチーさんは皆川さんがやってくると、ちらちら彼のほうをみたりする。イチチーさんやタロウ君はひっきりなしにわたしに話しかけてきた。その合間をぬうようにして、わたしは本を読んだ。

（わたし）はある日、いけないことをして、部屋に何時間もとじこめられてしまう。そこには古い本がたくさんあつて、おそらく書庫のようなところなのだろう、本をいためないように窓には分厚いカーテンがひかれていて、あかりがついていてもなんだか薄暗いように感じられる。そこには幼い（わたし）が読んで理解できそうな本は一冊もない。（わたし）は絶望的なきもちになる。古い本のかおりがとてもおそろしく感じられる。

わたしは黒表紙の本を一冊とりだして、床においた。

とても冷たい床で、冷気がたちのぼっているのがみえそうなくらいだ。わたしは中程の頁をひらいて、一枚破りとった。破りとった頁をきれいに折りたたんでズボンのポケットの奥にしまう。そのとたん。まるでどこからかみていたかのように外からドアがひらいてわたしは

お昼にいこう、とITCHーさんがひらいた頁を隠すように手をおいた。

歩いて数分の Pasta 屋さんにはいるなり、ITCHーさんはそこにはいない牧田君とみやちゃんのことを話しはじめた。

「どうやら牧田君はみやちゃん狙ってるみたいだね」

「みやちゃんはどうなんですかね」とタロウ君。喉が渴いていたのか水を一気に飲み干す。

「そうねえ、微妙かな。でも牧田君のこと嫌いじゃないみたいだけど。あ、でもこれ、牧田君にはいわないでよね。適当なことって誤解させちゃうとまずいから」

「わかってますよ、それぐらい」

「どうしたの、やつちゃん。がんばり過ぎて疲れた？」

「目がちよつと」

「だめだよ、適当にやらなきゃ」

「そうそう」

「だってどう考えたってあの量、あと一週間ちよつとじゃ読めないでしょう。スミレさんもせかしたりしないし、契約にはどこにも具体的数字みたいのは書かれてなかったし、無理することないよ」

「無理というか……そうだよ。どうやったって、期間内に全部は読めないよね」

「あたりまえだよ」

それよりさ、とタロウ君が身をのりだす。

「なんか牧田君はスミレさんにむかついてるみたいなんだよね」

「え、なんでなんで」とITCHーさん。

「最近、ほとんど部屋にいないでしょ。いい加減な仕事してんなよなあとかって」

「ああ、なるほどね。それはわたしもちよっとおもったかも」

お昼から戻るとスミレさんと皆川さんがいた。

牧田君とみやちゃんは一いつの雑誌をふたりで読んでいる。わたしが席につくと皆川さんがやってきて、「ちよつといいですか」とたずねた。はい、とこたえると皆川さんはドアのほうへ歩き出した。わたしはあわててあとをついていく。急に室内がしんとした気がした。

廊下にでると皆川さんは早足で階段をあがっていき、わたしはすこし遅れてついていった。いままでいた部屋の真上にある部屋のドアを皆川さんがあけて、「どうぞ」とうながした。

そこは下とおなじような部屋だった。ただ机がひとつしかなく、本棚もひとつしかない。暖房が下よりよくきいているのか、とてもあたたかい。でも頭がぼうつとなってしまうほどではない。

「今日からここで仕事をしてもらいたいんです」と皆川さんはいった。

はあ、とわたしが黙り込むと、「ひとりじゃさびしいですか」とたずねた。

「そんなことはないですけど」

「ここのほうがはかどるとおもうんです」

「はあ」

皆川さんが出ていってからしばらくしてスミレさんがわたしの荷物と原稿用紙と筆記用具をもってやってきた。彼女はなぜかにここにこしていた。

「ときどきわたしは皆川さんがようすをみにきますから」

そして彼女はCDウォークマンを机のうえにおいた。

「よかつたら聴きながら読んでください」

彼女が出ていくとわたしは本棚をみにいった。下にあったのとまったくおなじ本が並んでいる。下の部屋からなにか聞こえてこない

かと耳をすましてみたけれど、なにも聞こえてこない。妙なことになったな、と下にいるひとたちのことを考えながらおもった。でも考えてもしかたがない。どうせあと一週間ちよつとしかここには来ないのだ。

イヤホンを耳にいれて、再生ボタンを押す。流れてきたのはピアノの音色だった。(わたし)が好きなリストの曲だろうか。停止ボタンを押してCDウォークマンを開いてみると、なかには真っ白なCD-Rがあった。

二時間ぐらいして、こんこんとノックする音がした。はい、こたえるとドアが開いてイチーさんとみやちゃんが顔をのぞかせた。
「いい?」

「いいよ。もう休憩?」

「そうだよ。ねえ、なにしてるの、ここで」

おなじことだよ、とわたしは本と原稿用紙を指差した。ふたりは机の上をじろじろと見てから、部屋のなかをまるでなにかをさがしているかのように執拗にみまわした。

「スミレさんなんにも言ってなかった?」とたずねてみる。

「というか、あのひとやっちゃんたちが出ていってからすぐ消えた」「そっか……」

「なんでやっちゃんだけここにうつったんだろ。なんて言われた?」

「いや、詳しいことはとくに」

「ふうん。なあに、これ。やっちゃんの?」

ふたりはCDウォークマンを手にとると中身をひらいたり、イヤホンをして再生したりした。

「これなんの曲?」

「リスト、かな」

「リスト? それってクラシック?」

「うん」

ふたりはわたしの分の缶コーヒーも買ってきてくれていた。

「かわいそうにね、こんなところにひとりで。誰とも口をきかずに

「一日中わけのわからない本を読んでろって？」

「わたし、辞めるかも」とみやちゃん。

「そうなの？ 次の仕事、もうみつけたの？」

「ううん。でもなんか、肩こりとかひどくて、もう限界」

「イツチーさんは？」

「わたしはよくわかんない。考えてはいるけど」

「そうなんだ。タロウ君たちは？」

「さあ。そのへんのことは話してないからどうだか。みやちゃんが辞めるっていうのもまだ彼ら知らないし」

「そっか」

「やつちゃんは？」

「わたしはね……うん、あと一週間ぐらいだしね」

「まあねえ。でも一週間てけっこう長いよ」

翌日、みやちゃんがお昼にわたしを呼びにきた。

やけにあかるい表情をしている。

「お昼いこ。今日でわたしさいごだから」

五人みんなでカレー屋さんに行った。

みやちゃんはみんなとメールアドレスを交換した。牧田君は元気がなかった。

「上でなにしてるの？」とタロウ君がわたしにたずねた。

「だから本を読んでるんだよ」

「まじで？ パソコンでももちこんで内職とかしてるのかとおもった」

「まさか。そんなことはできないよ」

「じゃあさ、いったいどこまで進んだの？ けっこういつてるでしょ」

「それがあんまり。わたし読むの遅いから」

それは本当のことだ。読むのも遅いが、実際のところ原稿用紙にむかっている時間がぐっと多くなっていた。というのも、（わたし）がおもいをよせる女の子が行方不明になるところまで読んで、

わたしはこれが現実に起きたことを書いているのか、それとも作り話なのか判断がつかなくなってしまうたのだ。今まで読んだところをもう一度読み返してもみてもやはりよくわからない。

お昼をすまして部屋にもどると、皆川さんがわたしの椅子に腰掛けていた。本をひらいて読んでいる。皆川さん、と呼びかけると、ぱたんと本をとじて椅子からたちあがり、本棚に本をもどしにいった。彼はそれを一番下の右端にもどした。最後の本を読んでいたのだ。

「皆川さんはこの本、読んだことがあるんですか」とわたしはたずねてみた。

いままで彼が座っていた椅子には座らずに、机のうえに転がっている自分のシャープペンシルを手にとる。

「全部読んだよ」と彼はこたえた。

「全部、ですか」

「うん」

「すごい時間がかかったんでしょね」

「そうでもないよ」

「もしかして、ここで読んだんですか」

「そうだよ」

わたしはなんだか不安になった。

「どうしてこんなことをするんですか」

「さいごまで読んだらわかるよ」

わたしは首を横にふった。

「期間内ではともさいごまではいかないとおもいます」

大丈夫、と彼はいつて部屋から出ていった。

でも本当に、わたしは九日後にはもうここにはいないのだ。

それに、これらの本に出てくる（わたし）という人物がひとりではないことはもうわかつている。何人も、いや何十人という人間がするするといれかわって（わたし）と名乗っているのだ。

皆川さんがもどした最後の本を本棚からとりだして、最後の頁を

ひらいてみた。

風が強い夜に、（わたし）が友人がやってくるのを待っているところで終わっている。（わたし）が友人が来ないかもしれない理由を考えている途中で、ぶつりと文章がきれている。つまり未完なのだ。それから、この（わたし）はどことなく女性的で、濃いピンク色の花の鉢植えを出窓において退屈しのぎに眺めている。

翌日、下の部屋をのぞいてみると牧田君の姿がなかった。

イチーさんによると、昨日の帰り、誤ってスミレさんのアフリカスミレの鉢植えを床に落としてしまったのだという。鉢は粉々で、でも牧田君はそのまま黙って帰ってしまった。わたしたちも今日限りでこないつもり、と彼女は言った。

わたしは上の部屋にもどって本の読みかけの頁をひらいた。

窓からさしこむ光を反射させているCDウォークマンのイヤホンを耳にいれて再生ボタンをおすと、（わたし）が好きなロックミュージックが流れてくる。

それはわたしも好きな曲だった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5893o/>

アフリカスミレも泣く場合

2011年5月11日19時40分発行